

天使

PER CARITATEM
AD VERITATEM

vol.40 March 2026

T E N S H I C O L L E G E

専門職への誓い 看護の道を歩む第一歩



看護学科2年 加藤 藍俐

11月21日に、天使大学看護学科の伝統行事である戴帽式が開催されました。戴帽式ではナースキャップの授与やキャンドルサービス、誓いの言葉が行われました。ここでは、基礎の学び

や実習を乗り越えてきた私たちが、内省を通して、看護の道を歩んでいくことを改めて決意します。

正直、去年の私は先輩方の自信のある、凛とした姿を見て、自分もこのような姿になれるのかとても不安になりました。2年次生になってからは学びの専門性が上がり、日々仲間と励まし合い、周囲について行くのに必死な毎日でした。そのため、時間は目まぐるしく過ぎ、あっという間に実習を迎えていました。実習では、初めて患者を受け持ち、不安や戸惑いを多く感じていました。しかし、自分なりに患者さんと向き合うことで看護の在り方を追求し、看護の温かさを知ることが出来ました。

実習を乗り越えてからも時間の経過は早く、気づけば自分たちが戴帽生として後輩に背中を見せる番になっていました。緊張はありましたが、「今の自分が考える看護」について心の中に確立していたことで、不思議と自信が湧いていました。私はこの自信が、日々の学びや実習を仲間と乗り越え、成長し続けた



証であると考えます。

戴帽式にあたり、内省を通して、温かく見守ってくれた家族、厳しくも愛をもって支えてくださった先生方、そして互いに鼓舞し、支え合ってきた仲間感謝したいと思います。

戴帽式を通して得られた自信や感謝の気持ちを忘れず、看護の道を歩み、残りの大学生活も実りのある時間に出来るよう、精進していきたいと思っています。

ステップアップセレモニーに参加して



栄養学科2年 成田 夢衣

10月に行われたステップアップセレモニーに参加し、この1年を振り返る貴重なきっかけになりました。

式典の雰囲気は厳かな中にも温かさがあり、キャンドルの灯りを見ながら、管理栄養士を目指す自分の姿勢を改めて見直す時間になりました。

セレモニー前は、講義や実習、課題に追われる毎日で、自分がどれだけ成長しているのか実感しにくい時期もありました。しかし、式典に参加して、同じ目標に向かって励んでいる仲間の姿を見たとき、「自分もこの場所で少しずつ前に進んでいる。」と気づくことができました。また、ろうそくの灯火を受け取る瞬間には、管理栄養士という仕事が、人の健康や生活に深く関わる、責任のある職業であることを改めて感じ、気持ちが引き締められました。

特に印象に残ったのは、これからの学びに対する心構えを確認できたことです。大学の学びは、知識を身に着けるだけでなく、人に寄り添う姿勢や、相手の背景を理解する力も求められます。今回の式典を通して、自分が将来どのような管理栄養士になりたいかを考えるきっかけになりました。

今後は、講義や実習で学んだことを一つ一つ積み重ね、専門

職として胸を張って働けるよう成長したいです。ステップアップセレモニーに参加できたことは、気持ちを新たにできる大切な節目となりました。支えてくれている家族や友達、そして一緒に学ぶ仲間への感謝を忘れず、これからも前向きに学び続けていきたいです。



学びの振りかえり

実習を通して深まった看護観 ～学びが実践へ、実践が学びへとつながった1年～



看護学科 3年 徳田 香帆

天使大学に入学して約3年が経ち、この1年間は、専門性の高い学びと多くの実習を通して、自分の看護観が大きく深まった1年でした。忙しい日々の中で積み重ねてきた学習や課題は、臨地実習での実践につながり、多くの気づきと成長を得る機会となりました。

1年間を通して、講義で学んだ知識と実習での経験がつながり、看護を自分の言葉で考えられるようになったと実感しています。疾患の理解だけでなく、患者さんの生活背景や価値観を含めてアセスメントする視点が身につく、「なぜこの援助が必要なのか」「患者さんはどのように感じているのか」と、常に患者さん主体として考えるようになりました。3か月の実習を経て、特に成長を実感したのが成人実習Ⅱでした。3年次生最後の実習として、これまでの学びを統合しながら、自ら主体的に考え、深い対象理解を意識して関わることができました。誰一人として同じ人はいない

からこそ、その人にとっての最善を考え続ける看護の難しさを感じましたが、患者さんの思いに寄り添い、根拠に基づいた看護を提供できたことは大きな自信につながりました。また、実習を重ねる中で、仲間と声を掛け合ったり悩みを共有したりしながら支え合えたことは、日々の励みになりました。さらに、先生方がかけてくださる温かい言葉や助言は、迷った時に気持ちを整え、自分の課題に向き合う力を与えてくれました。

3年次生としての1年間は、看護の専門性と責任を強く実感し、看護師としての土台を築く時期でした。実習で出会った患者さんや看護師の方々から多くの学びや気づきを得られたことへの感謝の気持ちを忘れず、今後の看護実践につなげていきたいと思っています。そして4年次生では、これまでの学びをさらに深め、患者さんの「その人らしさ」を大切にしたい看護を実践できるよう成長していきたいです。

この1年の変化 ～心境の変化と行動の変化～



看護学科 1年 加藤 美奈

この1年を振り返ると、自分で考えて行動する力が大きく伸びた1年だったと感じています。大学生活が始まった当初は、友人づくりや履修登録、自学の進め方など、わからないことばかりで不安を抱えながら過ごしていました。しかし、立ち止まっても状況は変わらないと思い、自分から声をかけたり、興味のあることに挑戦してみたりと、行動する姿勢を意識するようになりました。勇気を出して一歩踏み出すことで気の合う友人に出会い、講義や課題にも前向きに取り組めるようになったことは、大きな自信につながりました。

特に印象に残っているのは、オープンキャンパスのスタッフとして活動した経験です。人前で説明することは得意ではありませんでしたが、「挑戦したい」という気持ちを優先して友人と共に参加を決めました。活動では、参加者への学校案内や先輩方と協力して進める場面が多く、責任感とコミュニケーションの重要性を実感しました。最初は不安もありましたが、やってみることでしか得られない学びがあることに気づき、自分の可能性を広げるきっかけとなりました。

また、児童会館でのアルバイトでは、小中学生との

関わり方や、周囲と連携しながら働くことの大切さを学びました。生徒の様子を観察し、どのようなサポートが必要かを考える経験は、看護学生として必要な視点を養うことにもつながったと感じています。さらに、職員の方々の考え方や姿勢から学ぶことも多く、自分も責任を持って行動しようという意識が強まりました。

この1年で、行動する前に考えすぎてしまう自分から、まず挑戦してみる自分へと少しずつ変わることができたと感じています。今後も失敗を恐れず、様々な経験を通して成長を続けていきたいと思っています。



オープンキャンパス 学生スタッフとして

実習で得た学びと成長 ～一人ひとりに寄り添った支援を目指して～



栄養学科 3年 吉川 朋花

3年次は後期に福祉実習、病院実習があったため、実習に向けた準備と振り返りといった目まぐるしい日々を送っていました。福祉実習は初めての実習ということもあり、不安を感じる部分が多くありました。

ですが、自分たちで考え調理した献立を提供し、美味しそうに食べている様子をうかがうことができ、食事の時間は利用者にとって心安らぐ大切な時間になっているのだと身をもって理解することができる機会となりました。

病院実習では、福祉実習に比べ課題も多く、一人では難しいことも仲間と優先順位を考慮しながら課題に取り組むことができました。実習前よりも時間の使い方、個人の得意不得意をいかした役割分担をする力を養うことができたと思っています。

また、栄養管理を行うにあたっては、データ上の情報だけで判断するのではなく、看護師や医師といった普段、患者さんとの距離が近い方からの話も参考にしながらその人に合った食事内容の調整を行っていました。講義の中でも、多職種連携の大切さについて何度も教わってきましたが、実際の現場に出るとより多職種連携の必要性を強く実感しました。これまでは講義で学んだ知識だったものが、今回の実習で「生きた知識」になったと感じています。

4年次の実習に向けて今回の学びを基盤にし、栄養の専門性をさらに磨き現場で求められる力を残りの学生生活の中で身に付けていきたいと思っています。「食べることは生きる糧」だと改めて実感したので、周りの方々への感謝の気持ちを忘れず、食事の面で心も身体もサポートすることができる管理栄養士になれるよう、励んでいきたいです。

大学一年間について



栄養学科 1年 谷 陽樹

大学に入学してから、もうすぐ一年が経とうとしています。この一年を振り返ると、大学生活は私に多くの成長をもたらししてくれました。入学当初から今に至るまで、環境に慣れることに必死で、講義の進め方や課題の量に戸惑う日々が続きました。まだ自分なりの学習スタイルを確立し、計画的に取り組む姿勢を身につけていません。しかし、輩の会の活動を通じて多くの成長を経験しました。

輩の会では、学外の人々との交流や仲間と協力して企画を進める経験を積みました。講義とは異なる形で主体性が求められ、自分の意見を伝える力や、相手の考えを受け止める姿勢を磨くことができました。特に、会の活動での発表や議論の場面では、緊張しながらも自分の言葉で伝えることの大切さを実感しました。これらの経験は、大学の講義だけでは得難い貴重な機会だったと感じています。

また、活動を通じて時間の使い方を意識するようになりました。講義・課題に加え会の準備も進める必要があり、限られた時間を効率的に使う工夫が求められました。最初は両立に苦労しましたが、優先順位を考え、計画的に行動する習慣を少しずつ身につけてきました。これは今後の大学生活において大きな財産になると感じています。

一方で、難しかった点もあります。活動の中で意見がまとまらず、議論が長引くこともありました。その際には、相手を尊重しつつ自分の考えを調整する難しさを痛感しました。しかしこの経験を通じて、協働には忍耐と柔軟性が不可欠であることを学びました。失敗や葛藤も含め、自分を成長させる糧となったと思います。

この一年を振り返ると、大学の講義だけでなく輩の会の活動も通じて、人との関わり方や主体性の大切さを学ぶことができました。今後は、学習面でも自分なりのスタイルを確立し、計画的に取り組む力を伸ばしていきたいです。輩の会で培った経験を活かし、大学生活全体をより充実させることを目標にしています。挑戦を恐れず、一歩ずつ前進していきます。



天使祭スタッフとして

学びの振り返り（大学院）

大学院での学び ～1年間を振り返って～



看護栄養学研究科 保健師コース 2年 佐々木 妙夏

大学院での時間は本当にあっという間で、もうすぐ2年が経とうとしています。これまでを振り返ると、ゼミ、実習、研究と忙しく大変さもあった日々でしたが、そのひとつひとつに出会いと学びがあり、自分自身の成長につながっていたと感じています。特にこの1年間は、地域での実習と研究も並行して就職活動もあり、自分自身と向き合う時間も多くなりました。ですが、1年次から続く実習を通して住民や保健師の方々と継続的に関わらせていただく中で、保健師活動の意義や役割について学びを深め、保健師としてどうありたいのかを考えることができました。

研究では、協力の依頼、データの収集・分析、論文執筆、発表といったプロセスを通して、主体的に考え自ら行動していくことの大切さとやりがいを経験しました。自分の研究と時間をかけて向き合うことは簡単ではありませんが、研究に関心もっていただきご協力いただいた方々、自分自身で考え抜くことをサポートして下さった先生方、互いに励まし合い「大変なのは自分だけじゃない」と思わせてくれた同期の存在に支えられてここまで来ることができました。研究を含めこの2年間で得た多くの学びと経験が、今後の自分の原動力になると感じています。修了後は、日々の出会いを大切にしながら、安心感と信頼感のある保健師になれるよう、励み続けたいです。

大学院での学びと成長 ～管理栄養士としての視野が広がった1年～



看護栄養学研究科 栄養管理学専攻2年 西村本 友花

この1年間は、計画した研究をこれまでに学んだ研究の知識をフルに活用しながら実践する日々でした。研究を通して、健康は栄養だけでなく多くの要因が複雑に影響し合って成り立つものであるということを実感するとともに、それらを踏まえて研究を計画し考察することの難しさも実感しました。自分で立てた計画どおりに進まないことや予想外の出来事が起こることもありましたが、その度に先生方の温かいサポートを受けて、安心して対応策を考えながら取り組むことができました。また、学会で研究を発表した際には、新たな視点からのご質問やご意見を多数頂き、自分の研究を見つめ直す貴重な機会となりました。そして、研究を通して現代の課題や明ら

かになっていないことについての新たな知見を社会に発信することの重要性も強く感じました。

私は学部卒業後、1年間社会人として勤務したのち大学院へ進学しましたが、ここでしか得られない経験が非常に多く、大幅なスキルアップに繋がり、進学して良かったと心から思っています。また、同期の院生や先生方との出会いは大きな刺激となり、多様な考え方に触れる中で多くの新たな発見が得られ、自分自身の成長に欠かせない経験となりました。これから私は病院に就職しますが、大学院で得た学びを大切に、一人一人の患者様に寄り添いながら、エビデンスに基づいてより良い栄養介入の方法を探求し提案できる質の高い管理栄養士を目指して、成長し続けていきたいと思えます。

大学院での学びと成長 ～助産師への第一歩を踏み出して～



助産研究科1年 村田 帆乃輝

助産研究科に進学してからの1年は、充実した学びの日々でした。大学院での講義は専門性が高く、自分の未熟さに気づくことも多くありましたが、学んだ知識が実践とつながる瞬間に大きなやりがいを感じました。

特に印象に残った学びは、基礎実習での母子や指導助産師さんとの関わりの中で、理論を実践に活かす経験です。助産学は病気の治療ではなくウェルネスの視点であるため、一人ひとりの価値観や思いに寄り添うことが求められます。学んだ知識をそのまま用いるのではなく、相手の状況に応じて柔軟にケアを実践する重要性を実感しました。

また、大学院でのグループワークや演習を通して、多様な価値観に触れる大切さも学びました。同じ課題

でも意見やアプローチが異なることで、一人では気づけなかった視点に出会うことができました。ケアの対象となる女性が直面する課題に対し、助産学生同士で向き合うことで、今後求められる能力や姿勢、そして自分がどのような助産師になりたいかを考えることができました。この一年は、知識や技術の習得だけでなく、助産師としての在り方を模索する大切な時間だったと感じています。

2年次は独立助産院実習や統合課題研究、発展・展開科目の履修も始まるため、より実践的な学びが増えると思います。今年培った基礎と自分の助産観を大切に、実習に協力して下さる母子やご家族、助産師さん、先生方への感謝を忘れず、確かな技術と信頼を兼ね備えた助産師を目指して、努力を重ねていきたいです。

天使大学・大学院 NEWS



看護栄養学部 看護学科

看護学科4年次生の事例研究発表が行われました。

2025年12月11日、12日に看護学科4年次生の「事例研究発表」が開催されました。学生たちは、4年間の学びや実習経験から自らの問いを立て、疑問を持ち文献検索を行い検討した内容をまとめ、事例研究・文研研究として発表を行いました。看護実践の多彩なテーマに対し、活発な質疑応答が繰り広げられ、学びの共有をとおして看護への関心をさらに高めていました。



看護栄養学部 栄養学科

牛乳・乳製品利用料理コンクールで本学生が銀賞を受賞しました。

このたび、北海道牛乳普及協会およびホクレン農業協同組合連合会が主催する「牛乳・乳製品利用料理コンクール」において、本学栄養学科1年次生の学生が銀賞を受賞しました。本コンクールは北海道内から多数の応募があり、入賞できたことは普段行っている講義の成果や栄養学科教員のサポートが活かされている結果となりました。



助産研究科

日本助産学会学術集会プログラム「全国助産師学生交流会&ポスター発表会」において、助産研究科2年次生が日本助産学会賞を受賞しました。

2025年11月15日、16日に開催された日本助産学会学術集会（幕張メッセ国際会議場）に、助産研究科2年次生が参加しました。全国の助産学生を対象に行われた全国助産師学生交流会&ポスター発表会で、「助産師として必要なことが学べており、報告からその内容がしっかり伝わった」と評価され、本学学生が日本助産学会賞を受賞しました。



看護学専攻保健師コース

大学院保健師コース修了生が「第14回日本公衆衛生看護学会学術集会」で課題研究の成果を発表しました

2025年12月13日、14日に石川県金沢市で開催された第14回日本公衆衛生看護学会学術集会で、2025年3月に大学院保健師コースを修了した4名が、在学時の課題研究の成果をポスターとして掲示し発表しました。現場の保健師の方々などからの質問に答え、取り組んだ研究の意義を改めて確認し学びを深めていました。学会では災害時の保健活動や母子保健の課題など多様なプログラムにも参加し、実践につながる学びを得ていました。保健師として働く同期との再会を喜び合い、お互いの近況に刺激を受けエネルギーをもらっていました。



就職進学活動を終えて

就職活動をとおして ～初心を忘れずに～

大学では、相手の立場になって考えることの大切さについて学びました。講義や実習でさまざまな人と関わる中で「この人はいま何を感じているのか」と想像しながら行動する習慣が身につきました。この学びは就職活動にも活かされ、病院の特徴だけでなく、そこで働く方々の思いや雰囲気にも目を向けるようになりました。

私は実習での経験が今回の就職先を選んだきっかけとなりました。患者さんには笑顔で寄り添いながら、コミュニケーションで得た情報をもとに個別性へとつなげて看護を実践している姿がとても印象的で心からかっこいいと感じました。その人がその人らしく生活することができるよう支えることが大切だと感じ、私もこのような環境で働きたいと強く思いました。

社会人としては、患者さんご家族に寄り添える看護師になることを目指しています。そのために、基礎を大切にしながら一つ一つ学びを積み重ね、その人らしく生きることを支えられるよう努力していきたいです。



看護学科4年 犬飼 香奈

就職活動・進学活動をとおして ～大学での学びを臨床現場へつなぐために～

大学での学びをとおして、管理栄養士として専門性を最も発揮できるのは臨床現場であると感じ、病院への就職を志しました。特に、災害支援に関心を持ったことをきっかけに、急性期医療の現場で経験を積み、患者さんの命と生活を支える栄養管理に携わりたいと考えようになりました。

就職活動の時期は臨地実習と重なり、学業との両立に苦労しました。しかし、実習が直近であったからこそ、現場で学んだ知識や疑問に感じた点、実体験を面接で具体的に伝えることができ、自分の考えを深める良い機会となりました。

社会人としては、日々の業務を通して知識と技術を着実に身につけ、患者さん一人ひとりの背景や状態に寄り添い、栄養面から安心して治療に臨めるよう支えられる管理栄養士を目指します。将来的には、災害支援にも積極的に携わり、専門性を社会に還元できる管理栄養士を目指していきたいです。



栄養学科4年 藤原 由依

地域に寄り添う看護師を目指して



看護学科4年 桑原 萌

私は幼少期から中学3年生まで、地元の帯広厚生病院に通院していました。その時に関わった看護師の方々はいつも丁寧に優しく、幼い私に安心感を与えてくれました。この経験から、「自分も住み慣れた帯広で地域医療に貢献したい」、「次は自分が支える側になりたい」と考えるようになり、地元にあるこの病院を志望しました。

大学では実習を通して、根拠に基づいた判断や多職種連携の重要性を学びました。さらに、受け持ち患者さんとの関わりを通して、思いを丁寧に聴く姿勢や状態変化を見逃さない観察力、状況に応じた判断力の大切さを実感しました。これらの学びは就職活動の中で「自分が目指す看護師像」を明確にするうえで大きな支えとなりました。

これから社会人として、努力を怠らず向上心を持って学び続け、地域の方々に信頼される看護師を目指したいです。温かく支えてくれた地元の病院で、次は自分が誰かの力になりたいと考えています。

大学で得た「食」の知識を武器に、人々へ幸せを



栄養学科4年 下田 桃子

私は、大学で学んできた栄養や食に関する知識を活かし、食を通して人々に美味しく豊かな生活を届けていきたいと考えました。そこで、3年次生の4～5月頃から、就活サイトで食品メーカーを調べてエントリーをしたり、大学が主催する就活講座に参加したり、情報収集を始めました。そして、興味のある企業のインターンシップや説明会に参加し、商品カテゴリーや健康志向食品の豊富さ、会社の雰囲気の良さなど、様々な点に魅力を感じたブルボンで働きたいと考え、選考を受けることを決めました。選考を受ける際には、就職相談室の方が面接練習に付き合ってくれ、自信を持って望むことができました。就活は、大学の就活支援も上手に活用しながら、早めに情報収集を沢山し、自分はどのような企業で働きたいのか考えて就活の軸を定めていくことが大切だと感じました。大学で学んできた栄養や食に関する知識を交えた商談ができるという自身の強みを活かし、大好きな商品たちをより多くの人々の手に届け、幸せを共有していきたいです。

実習と就職活動を通して ～看護学生としての成長と自己理解～

私は看護学科、最終学年の4年生で大きく成長することができました。この成長は3年生で臨地実習を乗り越え、自分の看護観や将来の自己像を想像し未来への活力を得られたからだと考えています。臨地実習の学びを通して自分の目指す看護師像は信頼できる専門性の高い看護師であると自覚することができました。

臨地実習を通して自分を見つめ直し、就職活動に励みました。脳神経系で専門性が高く、患者さんと退院後の生活も考えて携わることができる病院を探し、多くの合同説明会や病院見学、インターンに足を運びました。患者さんや看護師の表情、設備、看護理念をよく見て、自身の考えている看護師を目指せる病院を探しました。私が目指す看護師に近づくことができると感じた病院を見つけたあと、そこからは臨地実習での患者さんとの関わりや看護師としての展望、誰かの信頼できる人でありたいという、自分が大切にしたい考えを言語化し採用試験に挑みました。その結果、第一志望の病院に受かることができ、自分の目指す看護により近づいたと感じます。

自分の目指す看護師像として、看護観や看護技術をより深め、看護師としてジェネラリストとしての技術を獲得するとともに、専門性の高い知識・技術を身につけていくことが必要であると、4年次生の臨地実習を通して感じました。だからこそ、専門領域だけでなく基本的な看護技術からコミュニケーションなどの対人関係について理解し、人として成長していくことが必要だと考えます。臨地実習や看護研究を行うなかで、人として成長していくためには、看護師や学生同士との関わり、また患者さんとの関わりを通して、自分自身を客観視していくことが重要だと考えています。今後も看護師として、人としても成長していきたいです。



看護学科4年 佐藤 大空

「夢に向かう私を、周りの人が支えてくれた」 ～感謝と決意を胸に進む大学院への道～

高校生の頃から栄養を通して誰かの力になりたい、いつか先生になりたいという思いがあり、その夢に近づける環境だと感じて天使大学を選びました。入学後は実践的な実習やグループワークが多く、仲間と協力して学ぶ中で理解が深まり、学ぶことの楽しさを実感しました。先生方が一人ひとりに寄り添い、悩んだときも丁寧に向き合ってくれたことが私の支えになり、この環境で学び続けていきたいと思い大学院進学を決めました。大学院選抜の勉強を進める中で、日頃の講義が力になっていると実感しました。国家試験に直結する内容を丁寧に解説していただける講義は、復習するほど自信につながりました。辛いときは友人や家族の支えがあり、「一人じゃない」と感じられたことが大きな力になりました。これからは、ここで得た学びを自分の言葉で伝え、誰かの力になれる存在を目指していきたいです。夢への道には不安もありますが、そばで支えてくれる人は必ずいます。皆さんの夢が叶うことを心から応援しています。



栄養学科4年 五十嵐 さくら

体育祭を実施して ～体育祭運営を通じた自己の変化～



体育祭実行委員長 看護学科2年 稲川 彩恵

体育祭を行う前の私は、初めての学内開催ということもあり、当日の流れや雰囲気は想像できず、大きな不安を感じていました。準備を進める中でも、本当にスムーズに運営できるのか、参加する人全員が安全に楽しめるのかと心配する場面が多く、その点に難しさを感じていました。その一方で、学内開催だからこそできる工夫として競技場所や競技数を増やし、より多くの人に参加し楽しめる体育祭をつくりたいと考え、話し合いを

重ねて準備を行いました。実際に体育祭を終えてみると、その不安は達成感と自信へと変わりました。事前準備が当日の円滑な運営につながり、予想外の出来事にも周囲と協力して臨機応変に対応できたことで、自身の成長を実感しました。この経験を通して、責任をもって役割を果たすことや、仲間と協力することの大切さを学びました。皆さん一人ひとりのご協力のおかげで、体育祭を成功させることができました。本当にありがとうございました。



「鮭と鰯」

栄養学科 柳澤 健

父が転勤の多い職で、随分引っ越して、北海道中を転々しました。旭川で生まれ、札幌、旭川、網走、帯広、函館、札幌という順番です。その後、栃木県で就職して30年以上そこにいたわけですが、さて、北海道の食とはどうだったか、と考えると、あまり大したものも食べていなかったわけですが、網走にいた時の鮭(シャケ)を思い出します。

官舎のすぐ近くに網走川が流れていて、もう河口に近いわけですが、秋になると、鮭が上ってくるわけです。上流側へ歩いていくと昔の網走刑務所がありました。その手前に鮭捕獲のための堰があり、鮭の登ってくる時期には銀鱗がキラキラ跳ねることになります。そこでは、採れた鮭の即売もやっていて、母が一匹買ってくるわけです。私は、中学

生でしたが、冬休みの昼飯は毎日鮭の切り身を焼いたやつでお茶漬けでした。栄養的にどうかと今思いますが、油が乗っていて美味しく、飽きたことはありません。

なんでも、糸魚川-静岡を走るフォッサマグナを境にして、東は鮭文化圏で、西は鰯文化圏だということです。お歳暮などに新巻鮭を昔はよくやり取りしていましたが、西日本では鰯を送っていたんですね。今は、温暖化のせい、鮭が取れなく、イクラもばか高くなり、代わりに鰯が北海道沿岸で取れるようになってきたそうです。若干、寂しくも感じますが、時代の流れ。順応して、天使大学でも、美味しい鰯のレシピを考えてはどうでしょうか。本州で食べた、鰯のかぶら寿司はなかなか美味しかったです。

つれづれ考

本学教職員による
リレーコラム

あなたの声をお聞かせください

学報「天使」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりを目指しています。ご意見、ご感想、取り上げてほしい話題等ございましたら、下記あて先までお寄せください。

あて先/〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30 天使大学広報委員会 tel.011-741-1051 fax.011-741-1077



天使大学

看護栄養学部/看護学科・栄養学科
大学院/看護栄養学研究科・助産研究科(専門職学位課程)

〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30
TEL.011-741-1051 FAX.011-741-1077

第40号 2026年3月1日発行 天使大学広報委員会

<https://www.tenshi.ac.jp>

